OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鷗外手記資料「詩学材料」に関する覚書
Author(s)	青田, 寿美
Citation	語文. 1997, 68, p. 25-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68912
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

鷗外手記資料「詩学材料」に関する覚書

青田寿美

はじめに

現行の岩波版『鷗外全集』第三七巻は「手記一」と題して「語彙材料」「詩学材料」「楽劇材料」「塵冢」「日本芸術史資料」の五篇を収める。同巻「後記」には、次のようにある。

今回はじめて活字化される「楽劇材料」を除く四篇は前回の全集においてはじめて収録されたものである。その四篇については前回全集の「後記」(森於菟、沢柳大五郎氏)を再掲する。

校訂にあたっては「楽劇材料」「日本芸術史資料」は文京区立鷗外記念本郷図書館の原本に拠り、他は前回全集所収本文に従った。

「前回全集所収本文に従った」という「語彙材料」「詩学材料」「塵冢」の三篇に関しては、いかなる理由でか、現行の全集編纂時に鷗外自筆原本が参看されなかったようである。現在、「語彙材料」は文京区立鷗外記念本郷図書館(以下、鷗外図書館と略称)に、「塵冢」は東京大学総合図書館の鷗外文庫にそれぞれ所蔵されているが、「詩学材料」の原本は所在不明である。鷗外の自筆資料を蔵する図書館・記念館へ照会した限りでは、つまびらかにならなかった。

まず、「前回全集」つまり昭和二六年版『鷗外全集』に「詩学材料」が初収録されるに至った経緯をみておこう。

昭和二六年版全集の著作篇第二四巻(昭29・3)は「手記」八篇他を収録し、同巻附録「月報33」に「編集室より △急告」として「三月六日追記。森於菟博士の手許からはからずも新しい資料が本日発見されました。」とある。「「自紀材料」三冊」「日本芸術史」四十三巻」の「二種類の原稿は整理印刷の上、全集著作篇の追加として(多分一巻)発行」という予告がなされている。後に発刊されたのが別巻一(昭30・9)二(昭31・2)で、「自紀材料」「徂征日記」「日清役自紀」「日本芸術史資料」「詩学材料」の五篇が収録されている。別巻一「後記」によると「従来一度も公にせられなかつた手記抄録の類」で「総べて令嗣森於菟博士の許に蔵せられてゐたもの」という。「急告」当時からさらに三資料が「発見」されたことになる。ちなみに、「詩学材料」を除く「自紀材料」以下の四篇は、現在、鷗外図書館に蔵され、いずれも同館オープン当初昭和三七年一〇月受け入れの資料である。

「詩学材料」原本のみ行方が杳として知れないものの、後述するように、当該自筆原本の形態を類推し得る資料が鷗外図書館に存する。そのことを指摘した論は、寡聞にして知らない。「詩学材料」それ自体に言及した論考さえ少なく、手記資料という性質ゆえか、

研究史の網の目からとりこぼされてきたものと推察される。しかしながら、明治二一、二年頃の執筆と推定される本手記は、その題名からも明らかなように、鷗外の初期詩学論を考察する上で示唆に富むと思われる。

また、「詩学材料」に抄録された漢籍類は、現在、鷗外文庫に架蔵されており、本手記の執筆時期等の問題や当時の鷗外の読書傾向を探るよすがとなる。鷗外文庫に関しては、一五年間の長きにわたって『鷗外』に連載された坂本秀次「鷗外文庫」目録抄[1]があり、近年では、山根弘子氏の調査報告[2]もある。だが、両氏も述べているように、鷗外手沢本の書誌書目調査が重要視される一方で、実際には未だ多くの研究課題が残された領域である。

本稿では、「詩学材料」という手記のありようを考察する前提として、手記原本の輪郭を能う限り明らかにする。また、手記構成上の主要部分を担う抄録漢籍類に注目し、成立背景・構成等に言及する。併せて、本手記の資料的価値・意義を検証したい。

一　全集「後記」の記述をめぐって

昭和二六年版全集の著作篇別巻二のうち、「詩学材料」に関する「後記」(沢柳大五郎執筆)は、以下の通りである。長い引用になるが、全文を引いておく。

「東京医事新誌原稿用紙」と印刷した和紙の原稿用紙に毛筆で書かれてゐるが、用紙を貼継いだり白紙を貼附けたりして縦横に加筆してあるので、原形通りに活字に組むことは困難である。用紙の中央に「詩学材料」と書した一葉があるが、曽て綴ぢられた形跡はなく現在では適宜に切つてスクラップブックに貼られてゐる――これは最近に為されたものらしい――ので正確な順序も脈絡も分からない。今は現状に従つて印刷し餘白の部分に＊印を附して置いた。なほこれより前に「言語取調書」の罫紙に仮名文字で我邦の古歌を記し軽重堅軟鋭鈍強弱アイウエオ等の音韻を傍注したものがあるがこれは別筆であり、またこの部分の後に巻紙様の白紙に自筆で書かれた、詩想、詩語、詩材等の小見出しを附した漢文の鈔録があるが、これは殆ど凡て梁谿漫志宋李綱撰よりの書抜きであるから孰れも割愛した。本巻に収載した部分も大部分氷川詩式明梁橋撰、作詩志轂山本北山撰、詩律兆中井積善撰、詩法纂要貫名海屋編等よりの鈔録であるが、独逸詩学の用語を傍記してあつたりして若き鷗外先生の面目も窺はれる。東京医事新誌の原稿用紙に書かれてゐる所から推しておよそ明治二十一、二年頃のものと思はれる。

鷗外が書き抜いていたという『梁谿漫志』(全集本文では割愛)、そして「詩学材料」への抄録漢籍のうち『詩法纂要』、この二書の著者名が「後記」では誤記されている。正しくは、前者が「宋李綱撰」でなく宋費袞撰、後者は、「詩学材料」本文中にも「徐子」「詩法纂要」」の記述があるように、「貫名海屋編」ではなく清徐文弼編である。ちなみに、「詩法纂要」は「彙纂詩法纂要」ともいい、海屋貫名苞は和刻本校点者である。[3]

前回全集の「後記」に訂正や補足が施されないまま現行の全集へと再掲されていること、加えて、管見の限りそれを指摘した論者がいないことは、とりもなおさず、「詩学材料」という手記が、これまで研究対象として俎上にのせられてこなかったことを意味していよう。「後記」にいう如く本手記の大部分は漢籍の抄録からなり、

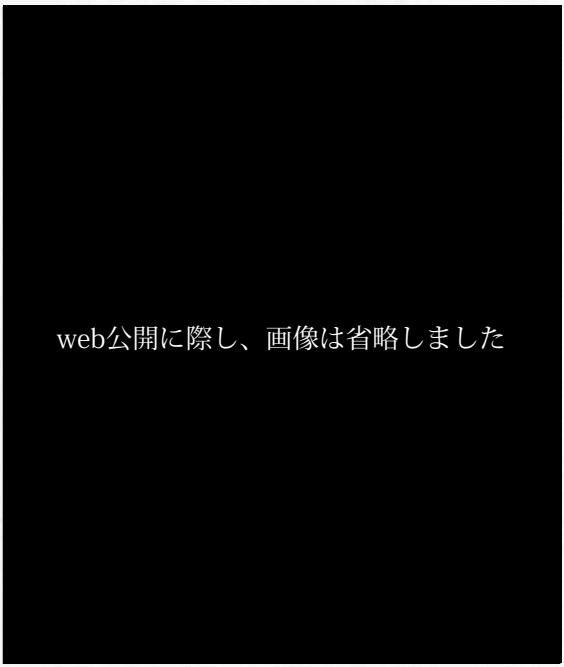
備忘録的性格が色濃いことは否めない。しかしながら、ドイツ語で詩学用語を列記し、それに対応させる形で漢籍からの抄録を付し、或いは漢文の行間にドイツ語の注記がみられるなど、ある種「一定の方向性」[4]を以て記されていることがわかる。また、次章での考察を先取りしていうならば、本手記の執筆が、明治二一、二年という鷗外の文壇活動開始時期と重なることや、ゴットシャル『詩学』の章題を用いて見出し語とするなど、鷗外の初期詩学論構築の一端を窺うに足る資料であると思われる。

「後記」によると、本手記の「原形」には「曽て綴ぢられた形跡はなく現在では適宜に切つてスクラップブックに貼られてゐ」たようである。「スクラップブックに貼られ」という形態であった点に注目するとき、その「原形」を類推する手がかりとなる資料が浮かび上がってくる。鷗外図書館所蔵の「文がら」と呼ばれるスクラップ帳がそれである（【資料1】参照）。

以下、簡単に書誌事項を述べておく。

「文がら」は、四冊のスクラップ帳からなる。いずれもA4サイズのファイルに黄土色の西洋紙三〇枚を綴じたもので、表表紙・背表紙には青インクで「SCRAP BOOK」と印刷されている。ただし「SCRAP BOOK」の字体には、ドイツ字体（ファイル「1」「5」）とOld English体（ファイル「3」「4」）に似た二種類がある。四冊共、表紙の裏に「昭和57年7月15日」の受け入れ印が押されている。背表紙にはそれぞれ朱ペンで「鷗外文がら　1」「3」「4」「5」と記され、登録番号は「200170」「200171」「200172」「200173」と連番になっている。従って、受け入れ当時から、「文がら」の「2」は存在していなかったことがわかる。

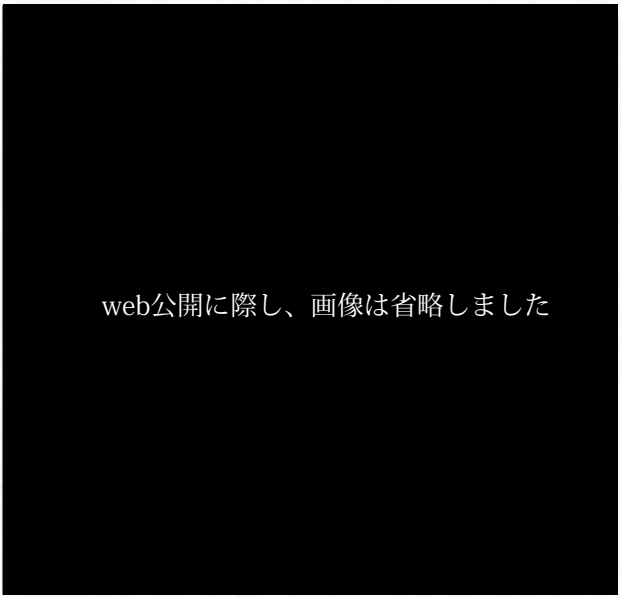
【資料1】（右）「鷗外文がら　1」表表紙・背表紙（左）「3」背表紙



スクラップされている資料は、一部、鷗外とは別筆の資料も含む。鷗外自筆分の種類は、雑記・メモ類を中心に、原稿の校正刷り、印税の領収紙等、多様である。執筆年代に関しては、順を追ってスクラップされたものではないが、その幅は広く、明記されているものだけをとってみても、早期では「明治二十二年十一月　海石榴舎（ツバヤ）シルス」、晩年のものでは「大正八年十二月三十一日　森林太郎」の日付と署名をみることができる。

「詩学材料」原本との関わりで注目したいのは、「3」と記され

【資料2】「3」見開き右から二頁目



た「SCRAP BOOK」である。ここに貼付された自筆資料のうちに、「梁谿漫志五」(二葉)・「梁谿漫志六」・「梁谿漫志七」と出典を明記して抄録を行った、計四葉のスクラップ片がある【資料2】参照。「美(滑稽)」・「美」・「美ト善」(二葉)と小見出しが付され、うち、一葉を除いて、縦一六センチメートルの用箋が使用されている。左右が裁断されているので横幅はわからないが、巻紙であった可能性が高い。この点、「詩学材料」と共にスクラップされていた『梁谿漫志』からの抄録箇所のありよう――「巻紙様の白紙に自筆で書かれた、詩想、詩語、詩材等の小見出しを附した漢文の鈔録」(全集「後記」による)――に似通っている。しかも、「3」の見開き右側から第一頁目及び二、四頁に『梁谿漫志』の抄録がスクラップされている。即ち、「詩学材料」等が貼付されていた「スクラップブック」と、「文がら」と呼ばれる「SCRAP BOOK」の「3」は、連続する性質のものと推測され、そうでなくても、「詩学材料」原本と「文がら」とが密接な関係にあることは間違いない。[58]「2」と記された「SCRAP BOOK」つまり「鷗外文がら」の「2」がかつて存在したという憶測が許されるならば、それこそが、全集「後記」にいうところの「スクラップブック」であったと思われる。

二　成立背景

二・一　執筆年代

「詩学材料」の執筆時期については、全集「後記」に、「「東京医事新誌原稿用紙」と印刷した和紙の原稿用紙」が使用されていることから「およそ明治二十一、二年頃のもの」という推定がある。

まず、「後記」の推定した年代を裏付ける考察をおこなっておきたい。「詩学材料」本文に、「元葭」「通泰」の名(元葭は佐藤応渠、通泰は井上通泰か?)を括弧書きにして、歌句と思しきことばを記した箇所がある。

Verb. (まねく尾花(元葭) まはたく星(通泰) 石人泣
李賀、女媧錬石補天処、石破天驚逗秋雨

「まねく尾花」以下「石人泣」までと同一の文辞は、鷗外手沢本として夙に知られているゴットシャル『詩学』への書き込みにもみえる。上巻一五〇頁の行間に、「まねく尾花（元萇）」「まはたく星（通泰）」「石人泣」と記されているのがそれである（墨筆）。周知のように、鷗外が『詩学』に依拠して文芸評論を展開していたのは明治二二年から三年にかけてのことである。従って、「詩学材料」なる手記は、『詩学』を繙いていた時期から時を隔てずしてなったものと考えられる。「詩学材料」所引の漢籍類に関していえば、その読書時期は明治二一～三年頃もしくはそれ以前ということになろう。

また、「まねく尾花」等が書き込まれた頁から一一頁前にあたる『詩学』上巻一三九頁の欄外には、「方言入詩」の書き込みがある（墨筆）。「方言」が「詩」の言説となり得る旨の書き込み文字は、全集収録時に割愛された部分の引用書『梁谿漫志』の鷗外手沢本（『知不足斎叢書』所収本、巻七・七丁オモテ）にみられ（朱ペン）、やはりまた、『詩学』繙読との時期的近接を示唆する。ちなみに、『梁谿漫志』本文中には「方言入詩」という記述もある。[6]「詩学材料」に書名がみえる漢籍類同様、『梁谿漫志』も明治二二年前後頃に閲読されたものと考えてよい。

前掲「後記」によると、全集所収の「詩学材料」は、「用紙の中央に「詩学材料」と書した一葉」と「東京医事新誌原稿用紙」に書かれた一連のスクラップを原本とし、一方、割愛された『梁谿漫志』からの抄録には、「巻紙様の白紙」が使用され「詩学材料」の直後にスクラップされていたようである。別用箋の使用であったとはいえ、両者の記述形式が類似する点を見逃してはならない。『梁谿漫志』抄録箇所の内容は、「詩想、詩語、詩材等の小見出しを附した漢文の鈔録」という「後記」の記述以外に詳細を知る術はないが、「詩学材料」にも〈詩学 Das dichterische Wort.〉〈詩之質 (Stoff)〉の見出し語や、「詩以言志。 Idee」等の文辞がある。また、鷗外手沢本『梁谿漫志』には、「詩想」「美」「詩ト画」「美ト善」「詩材」「詩語」といった書き込み文字がみられ、「詩学材料」の見出し語（後述「二・二」参照）とも通底する。この点を勘案すれば、「詩学材料」と『梁谿漫志』の抄録箇所とは、その資料的性質を等しくするものであるといえる。

ところで、「詩学材料」にみられる和漢の典籍からの抄録は、大部分が（ ）や〔 〕内に出典注記がなされた漢籍によって占められている。全集「後記」に主要抜粋書として記されている『氷川詩式』『作詩志彀』『詩律兆』『詩法纂要』に加えて『詩藪』『随園詩話』が、その主たるものである。しかも、いずれも詩話・詩作法の書に類する詩論・詩学の書であることに留意したい。これらの漢籍を鷗外旧蔵書にあたって調査したところ、多寡の違いはあるものの六冊ともに書き込みが確認され、[7]鷗外が傾注していた跡が窺える。また、初期評論へ引用された例もいくつかあり、[8]注目に値する。ひとまずは、ゴットシャルの『詩学』すなわち西洋の詩学書に拠って評論をものしていた時期と踵を接して、上述の東洋の詩学書を鷗外が繙いていたという事実を押さえておきたい。

これら詩話書の類は本手記の材料としてのみならず、初期評論への援用という意味においても、今後注目されてよいのではないだろうか。さらには、鷗外がゴットシャルの『詩学』と平行して東洋詩学関連の漢籍を繙読していた、その具体相の検討が重要な課題となってこよう。鷗外の初期文芸理論構築の様相を考察する上でも、本

手記が有している意義は小さくないといえる。

二・二　ゴットシャル『詩学』との関連

「前回全集」編纂当時の「詩学材料」原本がどういった状態であったのか、再び「後記」の記述を参看してみよう。まず、鷗外本人の手になるスクラップではないということが一つ。従って、全集本文の配列には第三者の手が加えられていることを念頭に置いておく必要がある。次に、「餘白の部分に＊印」を付けたという記述がある。そこで、＊印を目安に本文全体を区切るとすれば、一四のパーツに大別することができる。各々のパーツには、冒頭一行目に見出し語と思しき単語が記されている。二つのパーツのみ例外であるが、やはり冒頭から数行後には見出し語に該当する単語がある。つまり、一四の各パーツは冒頭部に位置する単語のもとに、ある程度まとまった記述がなされていると考えられる。

これらの見出し語には、ゴットシャル『詩学』上巻〈Begriff und Wesen der Dichtkunst〉の第一篇〈Die Poesie im System der Künste〉及び三篇〈Die Technik der Dichtkunst〉の各章題との対応関係がみられる。そこで、【表1】上段に、「詩学材料」から全集本文の表出順に見出し語を列記し、下段には、『詩学』の目次から章題を抜粋して示した。なお、上段の通し番号は便宜上私に付したものであり、『詩学』第二篇の章題及び節・項にわたる細目は省略した。

呼応がみられるのは、次の八つの見出し語である。

三と1.5.　四と1.1.　五と3.2.A.　六と3.4.
八と3.2.B.　九と3.1.　一一と1.3.　一四と1.4.

【表1】

「詩学材料」見出し語	ゴットシャル『詩学』章題
一　詩義	1. Die Poesie im System der Künste.
二　詩体 Gattung	1. Das Schöne und die Kunst
三　詩文 Prosa & Poesie	2. Die Dichtkunst
四　美ト術 Das Schöne & die Kunst	3. Die Dichtkunst und die Malerei
五　Bilder.	4. Die Dichtkunst und die Musik
六　平仄及韻 Vers & Reim	5. Die Poesie und die Prosa
七　Bilderfehler 諡差。差錯。誕妄	2. Der Geist der Dichtkunst.
八　Figuren	3. Die Technik der Dichtkunst.
九　詩字 Das dichterische Wort.	1. Das dichterische Wort
一〇　破文法 Dichterische Licenz	2. Bilder und Figuren
一一　詩術及画 Dicht. & Malerei	A. Bilder
一二　暗合 Reminiscenz. (Hamm, 125.)	B. Figuren
一三　詩之質 (Stoff)	3. Über den Gebrauch des bildlichen Ausdrucke
一四　詩術及楽	4. Vers und Reim
	5. Die vorzüglichsten Versmaße
	6. Altdeutsche, antike, orientalische Strophen

半数以上が『詩学』の章題に拠っていることがわかる。(9) ただし、目次との対応を瞥見したに過ぎず、残りの見出し語に関しても『詩学』に見出される用語かと思われるが、今のところ憶測の域を出ない。

では、「詩学材料」の見出し等の用語が『詩学』に依拠し、かつ、漢籍の抄録が併記されるといった、本手記構成上の問題は、いかに解釈できるのであろうか。例えば、「詩学材料」に論及した数少な

い論考のうち、北川伊男氏は、

『詩学材料』には、漢詩論書からのメモにドイツ語の傍記があり、それらに漢詩論を手がかりとして西洋詩学を理解しようとした跡がうかがわれる

と論じている。[10] だが、「詩学材料」における漢籍引用の意味を、西洋詩学理解のための「東洋の詩論」、西洋詩学理解の付随的役割と位置づけることは当を得ているのだろうか。

小堀桂一郎氏は、鷗外が『小説神髄』における逍遙の所論を理解しその小説観と対決する背景には「ゴットシャルに学んだ文学観」があったとし、その傍証として、鷗外旧蔵書『小説神髄』へのドイツ語書き込み文字が「ゴットシャルの語彙であったり、あるいはその著作中の独特の用語であること」を指摘した。[11] ゴットシャルの著書が帰朝後の鷗外の文学観に落としている影の色濃さ、西洋詩学を鼓吹する鷗外の初期評論活動のありようは、衆目の認めるところでもある。「しがらみ草紙」の本領を論ず」(『しがらみ草紙』1　明22・10)において、

今の詩文を言はんと欲するものは邦人の歌論と支那人の詩話文則にのみ拠るべきにあらず西欧文学者が審美学の基址の上に築き起したる詩学(ポエチック)（余等は故らに「レトリツク」の語を避けたり）を以て準縄となすことの止むべからざるを知ればなり

と、西洋詩学導入の必要性を説き、その実践として鷗外自らが精力的に評論を発表したのも、また周知のことである。しかしながら、本手記にもその書名がみえる『氷川詩式』を引用した後「嗚呼詩学豈東西の別あらんや」(「再び自然崇拝者に質す」『国民之友』52　明22・6)と論じた如き、東西両洋の詩学に向けられた鷗外の眼差しを掬い取ってゆくためには、彼が東洋詩学から摂取せんとしたものを見定めてゆく必要があるだろう。この意味において、西洋詩学と東洋詩学との相関という問題を孕んだ「詩学材料」は、今後さらなる検討を要する資料であることを、繰り返し述べておきたい。

三　「詩学材料」所引の漢籍について

「詩学材料」に抄録された主要な詩学書は、中国のものでは『氷川詩式』『随園詩話』『詩藪』『彙纂詩法纂要』、我邦のものは『詩律兆』『作詩志彀』である。前述の如く、全て鷗外文庫に所蔵され、鷗外の書き入れが確認できる。これらの漢籍からの引用を中心に「詩学材料」が構成されていることは、単なる偶然として一蹴し得るものではなく、本手記執筆に関わる鷗外の寓意をこそ看取すべきであろう。

中国の四冊に限ってみれば、『東京大学総合図書館漢籍目録』(平7・4、東京堂出版)では、『氷川詩式』『随園詩話』『詩藪』が集部・第四詩文評類・三詩話文話之属に、『彙纂詩法纂要』は集部・第三総集類・六詩文之属に分類される。『彙纂詩法纂要』は、例えば、長沢規矩也『和刻本漢籍分類目録』では『氷川詩式』等と同じく集部・詩文評類に分類されており、詩話書と目することも可能であろう。これら詩話書援用の意味が重視されてくるとともに、どのような詩話書が、いかにして抄録されているのかということが問題となってくる。

三・一　鷗外旧蔵詩話書の概要

さきに、『中国文化叢書』四「文学概論」(昭42・9、大修館書店)

の船津富彦「〈付〉詩話」の言によって、詩話書に関する概説をみておこう。

「広義的に詩話とは詩文に関する記録をすべて含んだものとなるが、狭義的には詩話という名称を持ち、主に詩に関する随筆を主体にし、幾つかの説話からなっているもの」で、「一般には評論に近いもの」を指す。中国では宋代以降「いろいろの内容を持つ驚異的な数々の詩話が作られ、日本においてもそれらは読まれたのみでなく」「江戸時代には実におびただしいほど創作され」たという。船津氏は、清何文煥撰『歴代詩話』(詩話27篇——船津氏があげた「目次」による数。以下同じ。)、丁福保撰『歴代詩話続編』(28篇)及び『清詩話』(41篇)の三書に所収された計九六篇を「中国人によって一応詩話と考えられたもの」とし、さらに「『歴代詩話』の序で何文煥が述べる如く、長篇のものはすべてカットされている」として六種の長篇詩話をあげている。総計一〇二篇は、氏のいう如く膨大な数の詩話書のごく一部に過ぎないとしても、ひとまずは中国の一般的な詩話とみることができる。

では、鷗外が所持・披見した中国詩話書は、船津氏のあげた書名のうち、どれくらいの数を占めるのだろうか。以下、『鷗外文庫目録　和漢書之部』『東京大学総合図書館漢籍目録』を参照して、一〇二篇中、鷗外文庫に所蔵されている詩話書名を抜粋し、のち、それ以外の鷗外旧蔵になる詩話文話の書名をあげる。なお、原本にあたって鷗外の蔵書印が確認できたもの、及び書中書き込み(圏点のみも含む)・識語の有無を〈　〉内に記した。また、印記等から「詩学材料」執筆の時期までに読まれたと推定される書名はゴチック体で示したが、その詳細は注に譲る。[12] ただ、個人全集や叢書等に収録された詩話を見落としているケースが考えられ、「詩話にはその書名が不同で一定していない場合が時々ある」という船津氏の言もあり、素描に留まることを断っておく。

『歴代詩話』のうち、

唐司空図『二十四詩品』(『龍威秘書』所収)
宋歐陽脩『六一詩話』(『歐陽文忠公集』所収)
宋魏泰『臨漢隠居詩話』(『龍威秘書』所収)　〈「森蔵書」〉

『歴代詩話続編』のうち、

唐孟棨『本事詩』(『龍威秘書』所収)
宋黄徹『碧溪詩話』(『知不足斎叢書』所収)　〈書込有〉
金王若虚『滹南詩話』(『龍威秘書』所収)　〈「森蔵書」〉
明瞿佑『帰田詩話』(『龍威秘書』所収)　〈「森蔵書」〉
明李東陽『懐麓堂詩話』(『懐麓堂全集』所収)
〈「森蔵書」「解組丙辰初同僚貽此書」〉

『清詩話』のうち、

清趙執信『談龍録』(『葉篆詩法纂要』巻三所収)
清査為仁『蓮坡詩話』(『龍威秘書』所収)　〈「森蔵書」〉

〔長篇詩話〕

梁劉勰『文心雕龍』
明梁橋『氷川詩式』　〈書込有〉
明胡応麟『詩藪』　〈書込有〉
清袁枚『随園詩話』　〈「森文庫」・書込有〉
清趙翼『甌北詩話』　〈「森文庫」・書込有〉

〔その他の詩話文話〕

清徐文弼『彙纂詩法纂要』　〈書込有〉

宋周密『浩然斎雅談』

〈「參木舎印」「橘井堂」「醫學士森林太郎圖書之記」・識語、書込有〉

清朱燮『詩法纂論』

清呉徳旋『初月樓文話』　〈「橘井堂」・識語有〉

清陳僅『竹林答問』

清繆艮『文章遊戯抄本』　〈書込有〉

『歴代詩話』『歴代詩話続編』『清詩話』所収の中国で一般的とされる詩話書のうち、鷗外旧蔵書は多いものであるとは決していえない。しかもその過半数が『龍威秘書』――一部を除いて、明治三一年以降の使用とされる「森蔵書」の捺印あり――所収の詩話である。従って、鷗外が基本的な詩話書を集書した上で読了・選択し「詩学材料」をなしたとは考えられない。当時手持ちの詩話書に書き込みを施しつつ耽読し、抄録するというのが、「詩学材料」における詩話援用のありようであったといえよう。ただ、船津氏があげた長篇詩話のうち、宋魏慶之『詩人玉屑』以外の五つを有し、うち四種の詩話書に書き込みを施して読破していることは注目されてよい。ドイツ留学前後の若き鷗外が東洋の詩学に興味を示し、詩話書の類を繙読していたことは、特記すべき事項であると思われる。

三・二　『氷川詩式』引用の問題

では、本手記において詩学書がアトランダムに引かれているかというと、そうではない。前述六種の詩学書に関して、書名や著者名を記し出典が明示されている回数をみてみよう（【表2】参照）。項目番号は、先の【表1】の見出し語と対応するものである。

【表2】

項目番号 ＼ 引用漢籍	氷川詩式	詩藪	隨園詩話	詩法纂要	詩律兆	作詩志彀
一	1	1				
二			2			
三	1			1	1	
四	13		3			
五	6	1	1			
六		1	1	1	1	
九	1					
一〇	1					
一二	3	1		1		1
一三	1		1			1
一三		3				
一四		1			1	1
計	27	8	8	3	3	3

『氷川詩式』の引用が合計二七回あり、他書の引用回数と比べて群を抜いている。つまり、「詩学材料」の執筆に際して、『氷川詩式』が重点的に利用されたことがわかる。と同時に、とりわけ引用が集中する第四項目〈美ト術 Das Schöne & die Kunst〉が重要な意味を有してくると考えられる。

〈美ト術〉の項目では、以下のようなドイツ語小見出しに続けて漢文の抄録があり、（ ）内に出典が記されている。漢文の引用を省略して、表出順にあげてみる。

Schön & Gut.（氷川引）／Schön & Wahr（氷川引）（氷川引）／Das Schöne（氷川引）（氷川引）（氷川引）／tragisch 悲壮（氷川引）／komisch 俳諧、滑稽／erhaben 雄渾、（氷川引）／Schön（典麗）（氷川引）（氷川引）（氷川引）／情 Idee（氷川引）／境 Stoff（氷川）／Das Schöne & Guts（隨園詩話）／Schön & Wahr（隨園詩話）（隨園）

『隨園詩話』の引用が後半に纏まってある以外、前半の引用書名

一三全てが『氷川詩式』で統一されている。従って、〈美ト術〉の項目を記すにあたり、鷗外はドイツ詩学用語との対応を追って集中的に『氷川詩式』を繙いていたと推測することも可能であろう。また、〈Schön〉〈Gut〉〈Wahr〉〈tragisch〉〈komisch〉〈erhaben〉〈Idee〉〈Stoff〉という小見出しの用語に注目すれば、本手記を執筆していた当時の鷗外にとって、美〈Das Schöne〉や芸術〈Die Kunst〉を定義し体系付ける上で、いかなる美的範疇の補捉が重視されていたのかが窺え、興味深い。

「詩学材料」における『氷川詩式』の引用頻度が何を意味するのか、その考察は他日を期したい。ただ、美と善〈Schön & Gut〉美と真〈Schön & Wahr〉といった西洋詩学の理念と東洋のそれとの相関、或いは美と芸術〈Das Schöne & die Kunst〉の認識や価値如何を『氷川詩式』なる東洋詩学書に探求しようとした、鷗外の腐心の跡が露わである点を指摘しておきたい。

おわりに

「詩学材料」という手記をめぐって、本稿では、所在不明の原本形態を推測し、成立背景や構成を明らかにしてきた。また、本手記に抄録された詩話書に注目することで、東洋詩学に向けられた鷗外の眼差しに照明を当てることを試みた。

「詩学材料」の見出し語の半数以上はゴットシャル『詩学』の章題と対応すること、先述の通りである。ただし、本手記における東西両洋の詩学の問題を、〈西洋詩学理解のための東洋の詩論〉と位置づけることが正鵠を射たものかどうか、疑問である。「詩学材料」における詩話書援用の意味は、西洋詩学を中核とする美学体系の整理という観点のみでは、究明し得ないと考える。

西洋美学論の移植、並びに東西詩学の融合——といったことばで、鷗外の初期文芸評論を評するのは、あまりにも容易い。鷗外の初期詩学論・美学論構築の具体相、そのダイナミズムを明らむる考察が必要とされることは言を俟たないだろう。本稿でとりあげた「詩学材料」は、詩話書の引用が多岐にわたってみられるなど、鷗外の東洋詩学摂取の様相が窺える好個の資料であるといえる。

注

(1) 連載第一回目の「鷗外文庫」目録抄—岡野他家夫蔵本『目録』『和漢書之部』より—(『鷗外』25 昭54・7)から、「『森鷗外文庫・蔵書目録』最終回 総括」(同54 平6・1)まで。

(2) 「森鷗外青年期の漢詩文受容(1)—「鷗外文庫」調査をめぐり—」(『近代文学 注釈と批評』創刊号 平6・1)、「森鷗外青年期の漢文学受容(2)—「鷗外文庫」調査をめぐり—」(同2 平7・5)。

(3) 長沢規矩也著『和刻本漢籍分類目録』(昭51・10、汲古書院)には、①安政二刊(大坂、河内屋喜兵衛等) ③明治印(大阪、文栄堂前川善兵衛)の、和刻本三種が記されている。また、『鷗外文庫目録 和漢書之部』(東京大学総合図書館、昭2・5編)に「彙纂詩法纂要〔明徐文弼 三〕」と記された鷗外文庫本は、安政四年一一月刊の上中下三冊本である。

(4) 山根弘子「森鷗外青年期の漢詩文受容(1)」(注(2)参照)の、全集未収録の鷗外自筆抄本「茶事雑抄」を取り上げての言である。「単なる抜き書きのみでなく鷗外の言葉で纏めたと思われる記述も含んでいる」と述べ、「著作と言えるものではない」いとしながらも、その資料的価値を評価している。

(5) 『国文学杜』(権田直助著、明18・5、柳瀬喜兵衛)の一部を和紙に切り貼りし、冒頭には鷗外自筆で「日本文学沿革略国文学杜」と墨書した資料がある(「文がら」の「4」)。一方、「詩学材料」に次のような記述がみえる。

国文学杜 Ode 〔二つには、祝詞文なり。延喜式に載れる、神の御前に白す詞をいふ。〕〔活字〕

国文学柱　〔皇国の古文、大方、六つに分れたり。其の一つには、記事文なり。古事記、風土記の類、古今の事実を記せるをいふ。但漢文を除く。〕〔活字〕

「皇国の古文…但漢文を除く。」は、『国文学柱』二之巻・巻頭「作文準拠」と題された章の冒頭の文で、「一つには」云々のくだりが下接する。「日本文学沿革略国文学柱」と書かれた資料では、「詩学材料」に引用された「皇国の古文」から「神の御前に白す詞をいふ。」までを欠いている。しかも、「三つには…」を貼付した直前に「四つには」に続く箇所が切り貼りされ、その上欄外に施された朱筆書き込み文学「国文学柱Ode」は、「詩学材料」の記述と照応する。おそらく、「詩学材料」の全集本文にある「〔活字〕」とは、活字の紙片を貼り付けてあることを示したものであろう。『国文学柱』の切り抜きは、鷗外の手によって「詩学材料」原本と「日本文学沿革略国文学柱」とに貼り分けられていたものと思われる。これらをさらにスクラップしたのが「文がら」ではなかったろうか。

(6)　「方言／擬人法／詩語」と、三行にわたる書き込みがみられ、当該箇所の『梁谿漫志』本文は、「方言入詩」の題のもとに「方言以て詩に入るべし。呉中以て八月露下りて雨となる、之を淋露と謂ひ、九月霜降りて雲となる、之を護霜と謂ふ。…（中略）…詩人は皆、之を用ふるに、大抵多くは呉の語なり。」（原漢文）となっている。例えば、方言と詩語の問題について、鷗外は「言文論」（『しがらみ草紙』7　明23・4）で「余等は独り新語の文に入るを喜のみならず又方言鄙語の時に詩に入るを嫌はざるものなり」と論じてもいる。

(7)　「詩学材料」所引の漢籍に関しては、『氷川詩式』『詩藪』に触れた竹盛天雄氏の論考がある（「鷗外　その出発」連載41、48、『解釈と鑑賞』平7・10、8・10）。ただし、竹盛氏が「書入れなし」と注した鷗外旧蔵書『詩藪』には、多少の圏点と次のような欄外書き込みが認められたので報告しておく。

巻数	丁数	書込文字（筆種）
内編五	一〇・オモテ	○（墨筆）
内編五	一八・オモテ	幽玄○（朱筆）
雑編五	一一・オモテ	○（墨筆）

なお「幽玄」の文字は、鷗外の手になる付箋に記されたものである。

(8)　「「しがらみ草紙」の本領を論ず」（『しがらみ草紙』1　明22・10）では、「古人云く」として『詩藪』の序文が引用され（注（7）竹盛論に指摘あり）、「言文論」には、「中井積善は嘗て詩を論じて云はく」として『詩律兆』巻一一「附録　論五」からの抄録がみられる（『詩学材料』にも同じ箇所が引用されている）。『氷川詩式』への言及は、「再び自然崇拝者に質す」（『国民之友』52　明22・6）「答忽月論幽玄書」（『しがらみ草紙』14　明23・11）の二評論をあげることができる。ついでながら、「明治二十二年批評家の詩眼」（『しがらみ草紙』4　明23・1）には「梁谿漫志にいはく」という引用例もある。

(9)　【表1】では省略しているが、〈3.2.A. Bilder〉は五節に細分され、1.Die Vergleichung／2. Die Metapher／3. Die Personifikation／4. Die Hyperbel／5. Die Metonymie　となっている。「詩学材料」の五番目の見出し語〈Bilder〉以下にも、1～5が同じ順で小見出しとして列記されている。【表1】上段の見出し語以外でも、ゴットシャル『詩学』に依拠するところは大きいといえる。

(10)　「初期の評論に表われた芸術観」（『森鷗外の観照と幻影』昭59・3、近代文芸社。初出は『鷗外初期の評論に表われた芸術観』皇学館大学紀要』昭51・1）。北川氏は、注（11）の小堀論から、『詩学』の〈Das Schöne und die Kunst〉に依って「文学ト自然」ヲ読ム」（『国民之友』50　明22・5）が書かれているという指摘を引用した後、「詩学材料」の見出し語〈美ト術 Das Schöne & die Kunst〉との関連を示唆している。ただし、各見出し語の対応には言及されていない。

(11)　小堀桂一郎「文学観の系譜」（『若き日の森鷗外』昭44・10、東京大学出版会）。

(12)　中井義幸編『鷗外印譜』（昭63・6、青裳堂書店）によると、「森文庫」印は明治九年頃から、「参木舎印」「橘井堂」（2.1×2.1cmの大印）は明治一二、三年頃からの使用がみられ、「醫學士森林太郎圖書之記」（小丸印）のある『高季廸先生大全集』見返し扉頁の余白に、「超欧北云。」として『甌北詩話』の文辞が墨筆で書き込まれている。中井氏によれば、「大学卒業から、独逸へ出発する十七年八月までの三年間」に集書した「江戸後期・明治初年の日本人の漢詩文集のコレクション」「多数の和漢の漢文小説」に押された蔵書印の一つが、「林太郎」印であるという。

〔付記〕本稿は、平成八年度大阪大学国語国文学会における研究発表の一部に加筆したものである。本文の引用は、「詩学材料」以外、全て初出に拠った。

なお、文京区立鷗外記念本郷図書館には資料掲載の許可を賜り、同館司書の岩村孝子氏からは貴重なご示唆をいただいた。末筆ながら深謝申し上げます。

――本学大学院博士後期課程――